

批判的思考実践の場としての情報処理入門

—著作権を考える—

小棹 理子¹・原田 康也²

1. 湘北短期大学電子情報学科（早稲田大学メディアネットワークセンター 非常勤講師）
2. 早稲田大学メディアネットワークセンター教務主任（早稲田大学法学部教授）

1. はじめに

既報[1][2]のとおり、早稲田大学メディアネットワークセンター(以下MNC)のコンピュータ初心者対象の半期科目の「情報処理入門」では、考える道具としてのメディアネットワークの利用を主体とした授業を行っている。一方、最近の情報機器やソフトウェア技術の進展はめざましく、PCおよび周辺機器、ならびにネットワーク（以下PC等）を利用した情報リテラシーの内容は2度目の変革を迎えようとしている[3]。PC等を用いなければならない情報技術は何か、についても配慮すべき時がきている。この動きは、大学入学以前の情報教育内容が大幅に変更されることも視野にいれなければならない。

ここでは以上を鑑み、批判的思考の実践の場として「情報処理入門」をとらえ、考えるテーマとして「著作権」を与えた。既報[1]のHTML文書を用いたプレゼンテーションに固執せず、新規に導入されたMicrosoft Windows2000環境でOffice2000を用いたプレゼンテーションも導入した。この結果、学生のPC等の操作技術のレベル差に依存することなく著作権に対する意識を高め、また、さまざまな観点から同テーマについて理解を深めることができた。

2. 「情報処理入門」の枠組み

前述のとおり、大学の学習環境を語学・一般教育科目・専門科目に関する勉学・研究に有効活用する方法を教育するために、情報環境における教養基礎演習としてのネットワーク・リテラシー科目として位置づけされている[4]。さらに、早稲田大学MNCの同科目履修者に対しては大学のWWWサーバーを利用したホームページの公開が認められることになる。したがって、同科目の基本方針として、カリキュラム上、① 教養基礎演習としての性格、と② 情報倫理の徹底、が要求されている。

その実践例としては辰己・原田・楠元[5]「メディアを利用した口頭発表と文書作成方法を身につけること」を第一目標としたコンテンツ主導授業や、筆者ら[6]の「物事を多面的に観察することを重視し、批判的に考える」分析的アプローチ型の授業が知られている。すなわち、小棹の授業においては以下が重視されてきた。

- (1) 問題解決・意思決定のための批判的思考力養成を目指した授業を指向
 - ① 物事を分析的に見ることの実践
 - ② グループ学習
 - ③ 段階的な目標の導入
- (2) 実例による情報ネットワーク社会における倫理と法的側面の認識

3. 問題点と改善点

既報 [2] にて指摘したことであるが、授業実践においては以下のような問題があった。

- ・学生間のコンピュータ操作等、メディア利用能力レベルの格差が大きい
- ・元来、HTML文書形式の発表資料は、思考上の、

Developing Good Thinkers through
Information Literacy—Critically Thinking
Copyright

Riko Ozao¹ / Yasunari Harada²

1. North Shore College of SONY Inst.

E-mail: ozao@mn.waseda.ac.jp

2. Waseda University

E-mail: harada@mn.waseda.ac.jp

いくなればコンテキスト作成上の、利点を利用しようとしたものであるにもかかわらず、見栄えを重視しすぎたり、あるいは、操作上の理解不足から特定の学生に依存したりする場合がある。

これら問題に対処すべく、以下を試みた。

- ・授業内では操作・実習中心とし、議論にメーリングリスト (ML) を活用した
- ・実習教室の新システム移行 (Windows 2000+ Office2000) に伴い、HTML文書化できない場合は Word文書ベースの発表資料を認め、同資料を共同作業フォルダ内に置くことによって、全員が閲覧できるようにした。

すなわち、Microsoft Office2000のWEB based collaboration環境を利用することによって、本授業本来の意図であるリンク型の思考を実践することに重点をおいた。このようにして作成されたリンク型のプレゼンテーション資料は、グループごとに実習室環境に用意された共同作業フォルダに置かれる。グループメンバーによる資料作成作業が容易になり、また、授業中に全員に資料配布することが可能となる。

4. MLを用いた「著作権の議論」

詳細は既報[7]に記したが、検索エンジンの高度な利用法を実践することにより、学生はさまざまな情報を得ることができ、活発な議論が展開された。一例を示す。

「音楽放送を家庭でテープ録音したり、文献を勉強のためにコピーしたりする場合のように、著作物を個人的にあるいは家庭内や少数の友人間などで使うために複製する行為については、著作権者の許諾を必要としません (著作30条1項)。よってコピーをとったり、先生が教材で使ったりするのは著作権を犯していません。(中略) 以下にいいサイトを紹介しておきます。

<http://www.cric.or.jp/> (わかりやすい)

<http://www.fujitv.co.jp/jp/misc/disclaimer.html> (わかりやすい)

<http://www.cric.or.jp/db/article/a1.html#030> (ちょっと難しい) ——文学部1年生」

5. まとめ

以上、ML上での議論をふまえ、授業では学生による発表がなされた。テーマとしては「著作権ビジネス」「ホームページの著作権と国際法」「映画の上映権」「学校の中の著作権」「中古ゲームソフト販売」「係争中の事例」など、多岐にわたった。それぞれの興味と理解度に応じた、しかし、十分な議論をもとにした、発表が行われた。

参考文献

- [1] 小棹理子・原田康也：「批判的思考力養成をめざした情報リテラシー—早稲田大学における分析的アプローチの実践例—」情報処理学会第60回講演論文集3L-01、pp. 289-290 (2000)
- [2] 小棹理子：「批判的に考えるための情報リテラシー—情報処理入門における分析的アプローチの実践」早稲田大学メディアネットワークセンター紀要、MNC公開シンポジウム「メディアと大学教育」分科会1「教養基礎演習としての情報リテラシー教育」(2000年1月29日)
http://www.waseda.ac.jp/mnc/RESEARCH/mnc_comm/proceedings/0011/04/index.html
- [3] 小棹理子・石川幹人：「情報基礎論：何をどのように教えるのか—学生による授業評価」情報処理学会第62回講演論文集2Y-05 (2001)
- [4] 原田康也・寛捷彦：「早稲田大学の情報教育：教育環境の構築とカリキュラムデザイン」平成11年度情報処理教育研究集会分科会論文集、pp. 51-54 (1999)
- [5] 辰己丈夫、原田康也、楠元範明：「早稲田大学における情報倫理を重視したコンテンツ主導授業の実践」平成11年度情報処理教育研究集会論文集、pp. 55-58 (1999)
- [6] 小棹理子・原田康也：「早稲田大学におけるコンテンツ主導の「情報処理入門」—分析的アプローチ」平成11年度情報処理教育研究集会論文集、pp. 358-360 (1999)
- [7] 小棹理子・原田康也：「批判的思考のための情報リテラシー：「著作権」を考える場の提供」平成12年度情報処理教育研究集会講演論文集 G2-9(2000)